

さまざまな建築物に使われている 株式会社イエムラのステンレス製品

建築物に使用するステンレス製の建材を製造する同社。建築物のデザインや用途に合わせ、高い技術力で加工した特注品を、宮城県内のさまざまな施設で見ることができます。

1 みやぎ産業交流センター「夢メッセみやぎ」(仙台市)

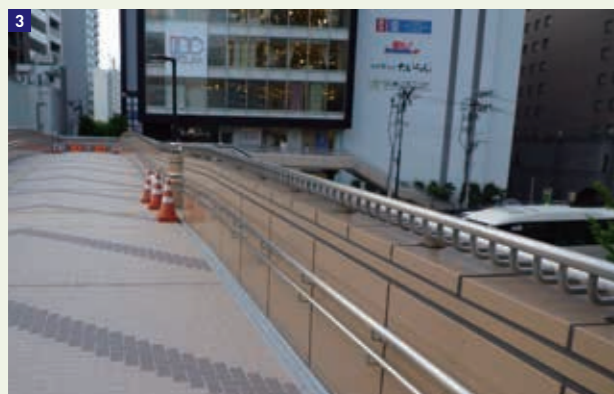
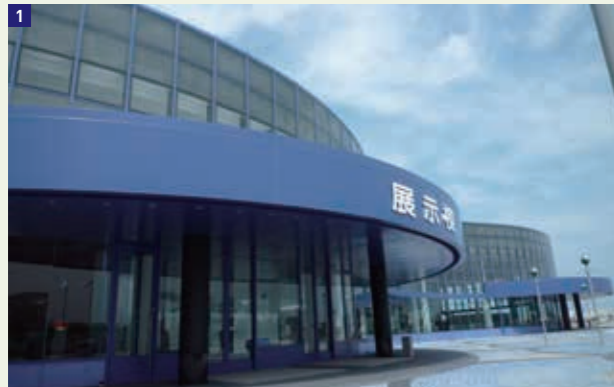
東日本大震災で津波の被害を受けた1階部分の出入口の扉や窓枠の修復を同社が担当。わずか3カ月で完成させた

2 東北歴史博物館 (多賀城市)

入り口に通じる通路に、新たに風よけとして設置されたサッシの製造を行った

3 仙台駅西口「ペDESTリアンデッキ」(仙台市)

広場と横断歩道橋の機能を持った歩行者専用的高架建築物をペDESTリアンデッキといい、転落防止のために取り付けられている手すりの製造を同社が担当している



駅など、たくさんの方が利用するさまざまな場所にイエムラの製品が設置されているんです」と真壁さんは誇らしそうに話した。

**自分の作業と先輩のサポートを両立
多くの作業を経験して腕を磨く**

入社6年目の真壁さんは現在、製品の組み立て加工や塗装、仕上げなどを行う「後工程」を担うグループに所属している。上司から任せられた製品の加工を行いながら、ほかの製品を作っている先輩社員から声がかかると、作業のサポートに回る。時には、材料に使うステンレス板の切断や曲げなどの加工を行う「前工程」を担うグループを手伝う場合もあるという。

少数精鋭、チームワークが強みの同社では、若手社員が1日にさまざまな作業に関わるのは当たり前のこと。「いろいろなことを先輩から直接教えてもらおうことで、新しい仕事を覚える良いチャンスになっています」と真壁さんは話す。

幼い頃にブロック遊びで夢中になり、高校生の時には趣味でオーディオ機器を自作したこともあった。そんな真壁さんが「ものづくりの仕事をするのもいいな」と漠然と考えるようになったのは高校3年生の夏、高校生対象の合同企業説明会の会場で同社のブースを訪れたときだったという。

「社長が会社の説明をしながら金属の部品を組み立て、製品のミニチュア模型を完成させた光景が、とても印象に残りました

た。「こんなすごいものを自分も作ってみたい!」と思い、就職を決めました」と振り返る。

**「達成感」が成長を後押し
オンリーワンのものづくりに喜びを感じる**

ものづくりに興味があったとはいえ、仙台西高等学校の普通科で学んだ真壁さんにとって、入社当初はすべてが初めての経験だった。

「先輩から渡された図面を見ても、最初はどっちが上かさえも分かりませんでした。職場にある大型の機械はもちろん、工具も初めて触るものばかり。そんな自分がここで仕事をするのができるのか、とても不

企業情報

株式会社イエムラ

所在地 / 名取市飯野坂字南沖 67-1
TEL 022-384-5310
<https://www.sus-iemura.co.jp/>

代表取締役社長 / 家村 秀也
資本金 / 3,000万円
設立 / 1994年7月
従業員数 / 20人(2018年8月現在)
事業内容 / ステンレス製建材の設計、製造、施工
経営理念 / 私たちは世界中の家族を守るために、家族を守れるヒトとモノをつくり、それを地球に残すことで社会に貢献します。



仕事
図鑑

CASE

01

まちの未来に足跡を残す 建築用ステンレス製品

製造
真壁 尚紀さん(25歳)

株式会社イエムラ(名取市)

7月のある朝、真壁尚紀さんは長さ数メートルのステンレス製の建材に穴を開ける作業に取り掛かった。作っているのは、エレベーターの乗降口に取り付ける枠の部分。真壁さんは、電動ドリルを使って建材を固定するボルトを通す穴を一つ一つ正確に開けていった。

「どんなに慣れている作業でも、油断によるミスやけがをしないように、慎重に行うことを心掛けています。作業に取り掛かる前に手順を決めておいて、それに従って進めています」

良いものづくりのポイントは、事前に行う入念な段取りと、作業中のこまめな確認だと真壁さんは話す。

「それと、身の回りの整理整頓も大切ですね。周囲が散らかっていると、集中して作業ができないため、仕事の出来ばえに影響してしまうんです」

株式会社イエムラは、東北地方を中心に、建築物に使われるステンレス製のドアやサッシ、手すりなどの製品を手掛けている。企画・設計から製造、施工までをワンストップで対応できることから、特殊な形状をした特注品でも短期間で納めることが可能。依頼主である建設業者や大手サッシメーカーなどから、厚い信頼を寄せられているという。

「大型ショッピングモールや公共施設、



製品がまちで輝く姿を想い
誠心誠意ものづくりに打ち込む

ステンレス製の建材に電動ドリルを使って穴を開ける真壁尚紀さん



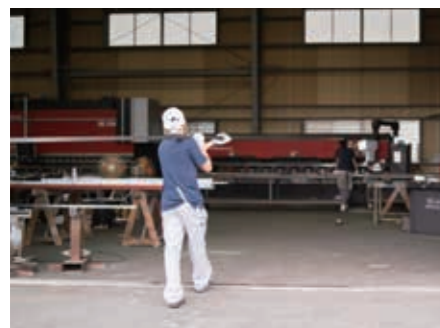
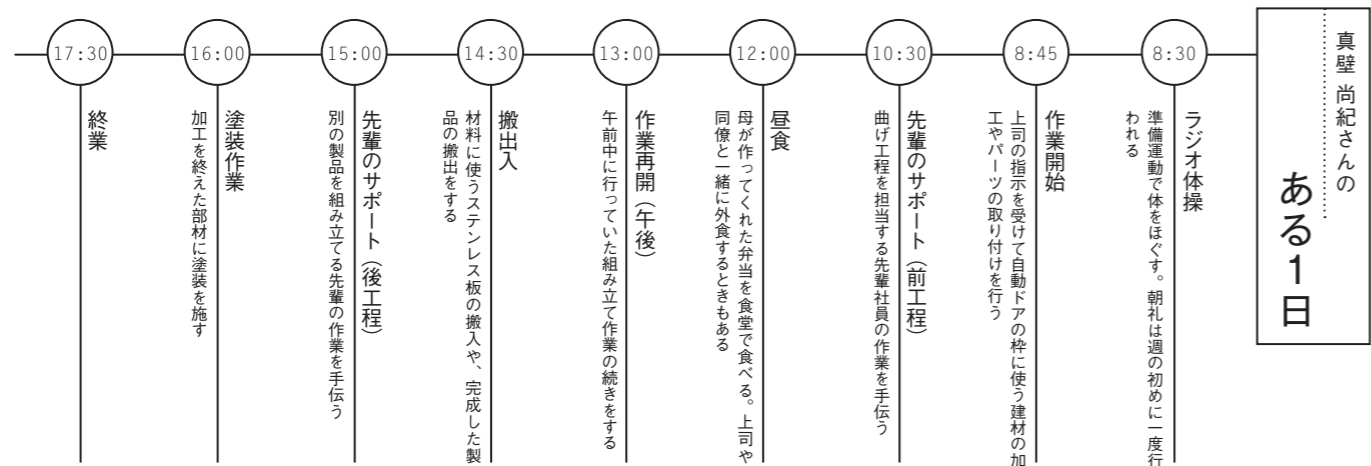
組み立てた材料を溶接してつなぎ合わせる



金属を折り曲げる機械で、慎重にステンレス板に曲げ加工を施す



操作盤に数値を入力し、機械を使ってステンレス板をカットする



次の作業に使う材料を担いで自分の持ち場へ運び込む



さび止め剤や塗料を吹き付けて製品を塗装する



図面を見ながら、上司の鈴木さんと作業方法について打合せをする

**未来のACEへ
先輩からの
アドバイス**

社会人になって大切だと感じたことは、人とのコミュニケーションです。私が働いている会社では、先輩の作業を手伝いながら仕事のことを教えてもらう機会が多いため、特にそう思います。

私はどちらかと言えば、人とコミュニケーションを取ることが苦手です。そのため、人の輪の中に積極的に入ろうと、毎日のあいさつはもちろん、休憩時間でも先輩や後輩と話をするように心がけています。そのときは、趣味やスポーツなど仕事以外のことを話すように意識しています。

みなさんも、就職先ではコミュニケーションを大事にしてください。そうすれば、仕事の悩みや分からないことがあっても、先輩に相談しやすくなるはずです。そして、新しくできることが増え、仕事が楽しく感じられるようになると思います。



上司に聞く

製造部 鈴木 孝博さん

「後輩」の存在を意識してこれからも挑戦を

任された仕事にひたむきに取り組む姿勢を評価

自分に与えられた仕事や、先輩の手伝いに入る様子を見てみると、指示通りに一生懸命取り組んでいるなど感じています。この仕事は、数年で何でもできるようなものではないです。入社6年目の真壁君にとって、覚えなくてはならないことはまだまだたくさんあります。先輩の仕事を見ながら、これからは多くのことを吸収して、成長していってほしいと期待しています。

その一方で、真壁君には後輩ができ、教える立場にもなりました。これまで身に付けた知識や経験を後輩たちに伝えていってほしいと思っています。

そして、後輩から追われる身でもあるので、現状で満足することなく、危機感と緊張感をもって仕事に向き合うことが大切です。失敗を恐れず自分の考えで積極的に行動することを心掛けて、より責任ある仕事を任されるような人材に育ってほしいことを願っています。

最近、真壁さんが関心を寄せているのが前工程の仕事だ。図面を見ながらステンレス板に印をつけて、複雑な形に手際良くカットする。これを機械で曲げ加工を施し、図面通りの製品に仕上げていく。

1枚の板から、どうしたらこんなに複雑な形の製品を作ることができるのだろうか……。先輩たちの作業を手伝い、目の前で練り広げられるその仕事ぶりを見て、いつも驚いているという真壁さんは、「いつか自分も先輩たちのように仕事ができるようにになりたいです」と話した。

現在、架け替え工事が進められている、仙台駅西口周辺のベダストリアンデッキ。同社は、手すりの製作を手掛けており、真壁さんも曲げ加工や仕上げ磨きなどの作業を手伝っている。

「独特な形状の手すりなので、想像以上に大変な作業です。それだけに、完成した製品を取り付け現場へ送り出すたび、ホッとします」

ある休日に仙台駅周辺へ出かけたとき、架け替えが終わったデッキに、自然と足が向いた真壁さん。「実際に手すりに触れ、今の仕事に対する誇りと、新たな仕事への情熱がわいてきました」と話す。

「作ったものがずっと形に残る仕事は、やっぱりいいですね」と笑顔で語る表情には、充実感が満ちあふれていた。



完成した製品を使って、工場長から加工のテクニックについて詳しく説明を受ける。経験豊富な先輩社員のアドバイスは、真壁さんにとって学ぶべきことばかりだという

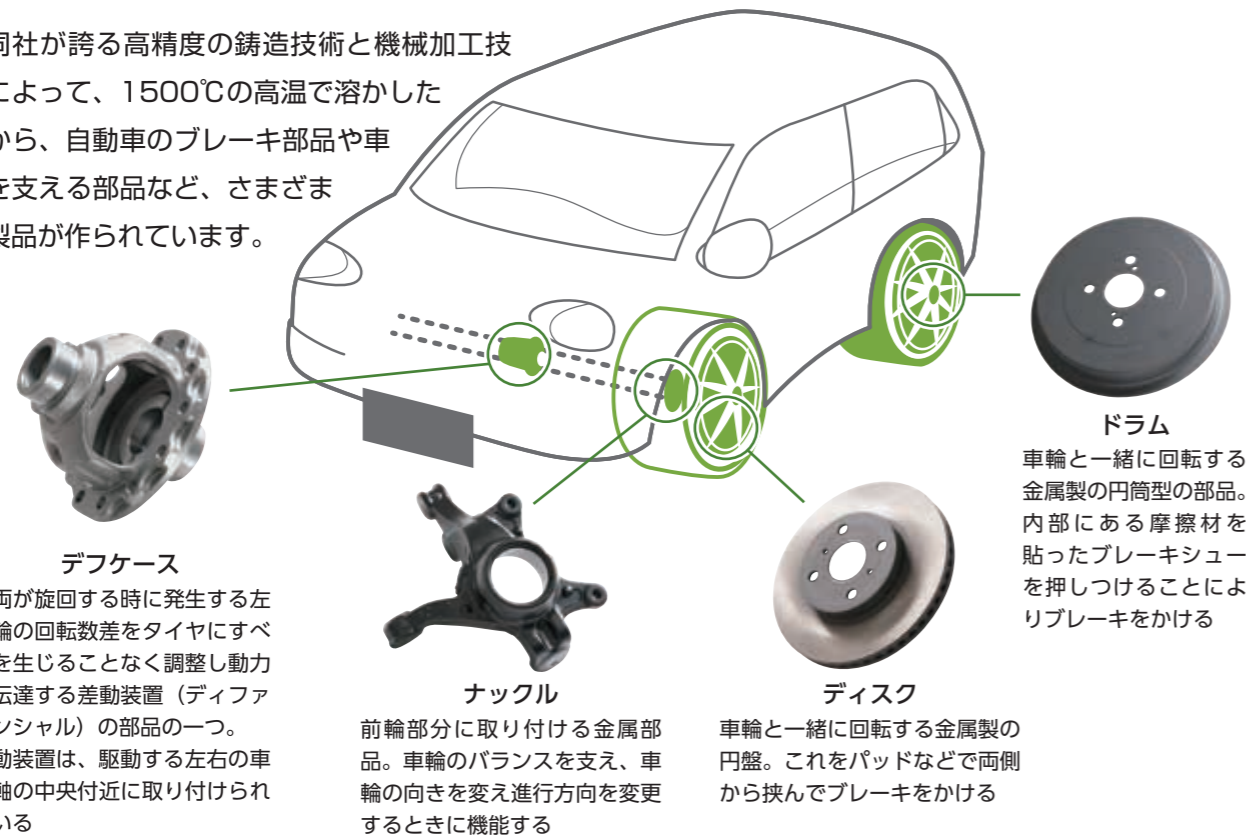
仕事図鑑 CASE 01

**まちの未来に足跡を残す
建築用ステンレス製品**

製造
真壁 尚紀さん (25歳)
株式会社イエムラ (名取市)

自動車の安全な運転を支える アイシン高丘東北株式会社の鋳造部品

同社が誇る高精度の鋳造技術と機械加工技術によって、1500℃の高温で溶かした鉄から、自動車のブレーキ部品や車輪を支える部品など、さまざまな製品が作られています。



デフケース

車両が旋回する時に発生する左右輪の回転数差をタイヤにすべりを生じることなく調整し動力を伝達する差動装置（ディファレンシャル）の部品の一つ。差動装置は、駆動する左右の車輪の中央付近に取り付けられている

ナックル

前輪部分に取り付ける金属部品。車輪のバランスを支え、車輪の向きを変え進行方向を変更するときに機能する

ディスク

車輪と一緒に回転する金属製の円盤。これをパッドなどで両側から挟んでブレーキをかける

ドラム

車輪と一緒に回転する金属製の円筒型の部品。内部にある摩擦材を貼ったブレーキシューを押しつけることによりブレーキをかける



責任やプレッシャーと闘いながら製造ラインと作業者の安全を守る

塗装を終えたブレーキ部品の表面に異常がないか確認する中米宏次朗さん

CASE 02 仕事 鑑

高精度な加工技術で自動車の鋳造部品を製造

製造 中米 宏次朗さん (32歳)

アイシン高丘東北株式会社 (大衡村)

ブレーキ部品の塗装工程で班長を支える「チームサポーター」

塗装されたばかりの自動車のブレーキ部品を手に持ち、中米宏次朗さんは真剣な表情で視線を送っていた。

「ブレーキ部品は、車を安全に制御するために欠かせないパーツの一つ。小さな傷も見逃さないように、こうして人の目で一つ一つ検査しているんです」

中米さんが働くアイシン高丘東北株式会社は、鉄を高温で溶かし、砂型に流し込み冷やすことで金属部品を成型する「鋳造」と呼ばれる方法で、自動車のブレーキ関連部品などを製造。自動車メーカーに高品質で高精度の製品を届けている。

鉄が冷めた後、型を壊して取り出した鋳造部品は、表面を機械で削ったり磨いたりする。さらに、「ディスク」や「ドラム」といった一部のブレーキ部品は、さび止めのために塗装を施す。この塗装工程を担当する中米さんは、工程の責任者である班長を補佐する「チームサポーター」として働いている。

「チームサポーターは、製品の外観検査のほかにも設備の点検や作業員の体調管理など、工程が順調に進むように班長と連携を図りながら、いろいろな仕事をしています。気を配ることが多くて大変なポジションですが、広く製造に関わることができるので、やりがいを感じています」と中米さんは話した。

小さな予兆も見逃さない 工程の隅々まで意識を行き届かせる

「ディスク」や「ドラム」を機械加工するラインは8つあり、各ラインで加工を終えた製品が、続々と塗装ラインに到着する。それぞれの製品は、生産計画に従って事前にプログラムされたスケジュール通りに、塗装設備に送り込まれる。塗装はロボットによって自動で行われ、1時間当たり約420個、1日で約7000個のペースで処理されているという。

「トラブルで塗装工程が止まってしまうと、前工程である機械加工のラインすべてに影響が及んでしまいます。それだけに、重大なトラブルの予兆となる小さな異変を見逃さないように心掛けています」

設備の調子が悪くなり保全担当部門に連絡をする際には、「どの部分か」「いつごろから」「どんな症状を」「何回繰り返したか」などについて、正確に伝えなくてはならない。そのため、中米さんはラインを巡回しながらそれぞれの設備をこまめに確認し、トラブルにつながりそうな兆候を逃さず記録しているという。

「各設備の注意点やトラブルの対処法などについて保全担当者から聞いたことは、必ずノートにメモしています。日頃から設備のクセを知っておくことが、ラインの安定した稼働につながると思っていますから」と中米さんは説明する。

こうして、塗装を終えた製品は、最終検

査を経て自動車の組み立て工場へ出荷される。毎日集計される1日の生産数は、中米さんにとってモチベーションにつながっているという。

「自分たちが作った成果が、数字として表れるのがものづくりの良いところ」と話す中米さん。「チームサポーターになってからは、別の塗装チームのことを勝手にライバル視して、『良い製品をたくさん作るぞ!』って燃えているんです」と笑顔で話した。

「大好きなクルマに関わりたい」 期待を胸にもつくりの道へ

高校生の頃、自動車に興味を持ち、「将来はクルマに関わる仕事がしたい」と思っ

企業情報

アイシン高丘東北株式会社
所在地 黒川郡大衡村大瓜字青木 83-2
TEL 022-739-7155
http://www.at-takaoka.co.jp
※アイシン高丘株式会社 HP



代表取締役社長 大橋 健
資本金 4億9,000万円
設立 2009年1月
従業員数 249人 (2018年8月現在)
従業内容 鋳造製品の鋳造・機械加工
企業理念 品質至上で未来の創造



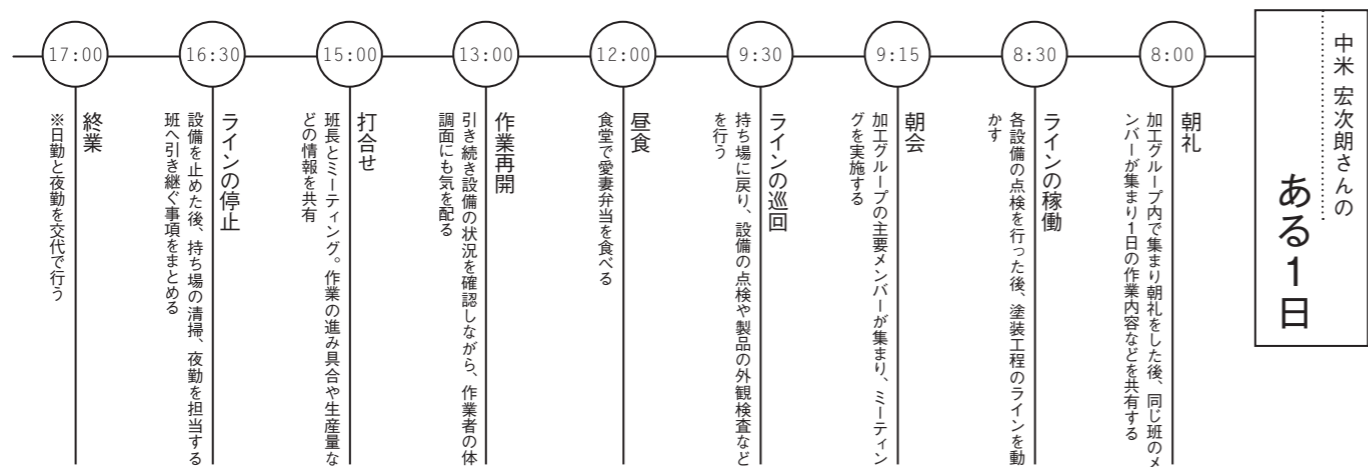
塗装を終えた製品が運ばれる様子を確認。設備に異変がないかチェックする



ロボットがテンポよく製品の表面にさび止めの塗装を施していく



スケジュールに従い製品を塗装する順番を入力する



班長と打合せ。報・連・相を徹底して情報を共有する



保安担当者から設備を管理するポイントなどについてレクチャーを受ける



異変に気が付いたら、機械を止めて詳しい症状を確認する

社員に聞く



加工グループ 加工係 係長 三浦 寿門さん

製造部門の「最後の砦」を守るキーパーソン 広い視野で作業全体を見通す力をつけてほしい

自動車を安全に制動するための部品を作っていることや、絶対に不良品を見逃してはいけない製造の最終工程を任されているという緊張感の中、チームサポーターとしてよく頑張ってくれていると思っています。

チームのメンバーと積極的にコミュニケーションを図り、現場の良い雰囲気を作り出してくれていますし、メンバーの作業上の安全や体調にもこまめに気を配っています。中米くんは、塗装工程の要として円滑なライン稼働に大きく貢献してくれているので、いざれ班長を任せられる逸材だと期待しています。

ただ、持ち前の真面目さが災いして、一つのことにとこだわり過ぎるあまり、肝心なところを見落としてしまう場面がたまに見られます。ものごとをもっと広い視野で見つめ考える力を養い、さらなる成長を成し遂げてほしいと思っています。

ていた中米さんは、利府高等学校を卒業後、ガソリンスタンドへの就職を経て、5年前に同社に入社した。

「転職してもやっぱりクルマに関わりた」と思っていました。だから、クルマの部品を作っているこの会社の求人を見て、就職を決めました。

入社後に物流部門へ配属された中米さんは、1年半後に製造部門に異動し、塗装工程に携わった。

程を担う塗装工程の仕事に対する大きなプレッシャーを感じたという。

「塗装工程での製品の外觀検査は、実質的な最終検査にあたります。ここでキズなどに気付かず製品を出荷してしまうと、組み立て工場から不良品の連絡が入るんです」。こう話す中米さんも、過去に不良品を見逃すミスをした経験があるという。

「異動して半年くらい経ったときのことです。取引先から不良品の連絡を受けたため、ラインをストップさせ、工場にある同じ品番の在庫を全品確認しました。たくさ

んの人たちに迷惑をかけてしまい、かなり落ち込んだことを今でも覚えています」と肩を落とした。

失敗を乗り越えステップアップ 生産性向上に貢献しリベンジを果たす

中米さんは、上司のアドバイスを参考に、より慎重な作業を行うように心掛けた。その努力が実を結び、昨年の1月からはチームサポーターとしての新たなキャリアを築いている。

今年、塗装ロボットの調整を中米さんが行った結果、製品の品質と生産性の向上につながったことがあったという。

「2年前に産業ロボットメーカーが実施する研修会に参加したのですが、そのときに学んだことを現場で生かすことができたとうれしかったですね」と晴れやかに語った。

「もっと経験を積んで、ほかの工程も担当してみたい。そして、これまで以上に広くものづくりに携わりたいと思っています」とさらなる活躍を誓った。

休日、出かけた先で同社の製品を搭載している車種を見つけると、「部品の塗装の状態はどうか...」と思わず自動車の足回りに目が行ってしまうという中米さん。大好きな自動車に関わる幸せを日々かみしめながら、これからも自動車の安全を支えるものづくりに魂を込める。

CASE 02 仕事図鑑

高精度な加工技術で 自動車の鋳造部品を製造

製造 中米 宏次朗さん (32歳)
アイシン高丘東北株式会社 (大衡村)



ここがACEポイント!

ライン作業のリーダーの仕事は、作業をトラブルなく円滑に進めることが最大のミッションであるが、それ以外にも幅広い業務を行っている。

「意外と重要な仕事だが、作業者の体調の管理です」と中米さんは話す。ラインの状況を見ながら、作業者に休憩のタイミングを指示し、その間は中米さんが代わることがあるという。

設備も人も健康であってほしいので、良い製品を作ることができるのである。

未来のACEへ 先輩からのアドバイス

ものづくりの現場では、仕事に必要な知識や経験を入社してからでも十分身に付けることができると感じました。弊社では、研修や教育の仕組みが充実していると思うので、学生のうちから心配する必要はないと思います。

むしろ、就職してから自分でどれだけ多くのことを経験して学ぶことができるかが重要な点だと思います。

ものづくりの一番の魅力は、仕事の成果を実感しやすいことではないでしょうか。また、チームで働くライン作業は、メンバーが協力しながら同じ目標に向かって仕事ができるのが楽しいですね。時に励まし合い、時に刺激し合いながら、自分のスキルを高めることができるので、充実した仕事の時間を過ごすことができると思います。



仕事
図鑑 CASE
03

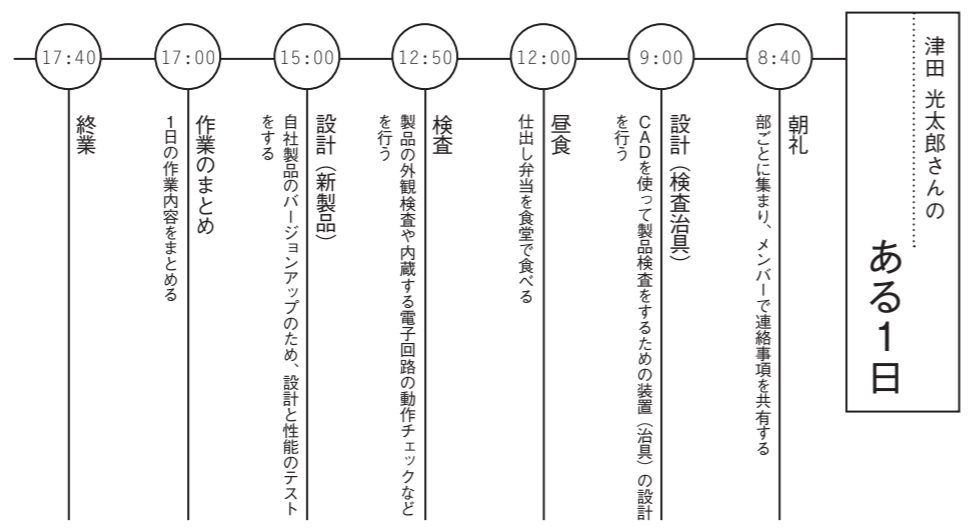
先端技術が光る ユニークな製品を創造

設計
津田 光太郎さん (28歳)
東北電子産業株式会社 利府事業所 (利府町)

独自分野で製品を生み出す
研究開発の一翼を担う

ホタルが放つ光の1万分の1という微弱な光も検出可能な、超高性能の測定装置「ケルミネッセンスアナライザー」。食品や医療など、さまざまな分野で活用され、海外にも輸出されている。

同装置を開発した東北電子産業株式会社は、研究機関向けの特種な計測機器などの設計・開発・製造を得意としている。創業から半世紀にわたり培ってきた研究開発力を武器に、光やエレクトロニクス分野で独自のものづくりを展開する。



試作機を作るために必要な電子部品を確認する



パソコンに向かって設計やテスト結果の解析などを行う



先輩社員から製品の検査方法についてレクチャーを受ける



製品に組み込むレーザー制御機器の性能をテストする



- 1 検査治具の組み立て作業の進み具合について製造担当者と話す津田光太郎さん
- 2 極微弱発光検出装置「ケルミネッセンスアナライザー」。食品の酸化による劣化度を測定する装置として開発された
- 3 自社開発製品「ルミリーフ」。コチヨウランの葉に、蛍光剤を使って文字やイラストを描いたギフト商品。葉へのダメージを最小限に抑える特殊なレーザーを使って蛍光剤を流し入れる技術を同社が開発した



一人一人との対話を大切に
アイデアをカタチにする

企業情報
東北電子産業株式会社
所在地 / 本社：仙台市太白区向山 2-14-1
TEL：022-266-1611
利府事業所：
宮城県利府町しらかし台 6-6-6
https://www.tei-c.com/company/
代表取締役社長 / 山田 理恵
資本金 / 6,000万円
設立 / 1968年4月
従業員数 / 50人(2018年8月現在)
事業内容 / 電子応用機器、各種産業用電子計測システム、レーザー制御機器、理化学機器等の開発・製造・販売・輸出入業務
企業理念 / 光と電子の未来を拓く

に興味を持ったという津田さん。プログラムの仕組みをひも解きながら、しだいに「自分も作ってみたい」と思うようになった。こうして、高校を卒業後に東北工業大学の情報通信工学科に入学し、本格的にプログラミングについて学んだ。

就職活動中に参加した企業説明会で、独自の分野でユニークな自社製品を作っている同社に、「面白いことがたくさんできそうな会社だな」と魅力を感じたという。

津田さんの直感通り、入社3年目に同社の初のスマートフォンアプリの開発に携わった。現在は、会社の看板製品であるケルミネッセンスアナライザーのグレードアップの研究開発に汗を流す。

「これまでのチャレンジが、仕事に対するモチベーションにつながっています。これからも、多くの経験からたくさんのごことを学び、幅広く仕事ができるようになりました」と津田さんは語った。

**未来のACEへ
アドバイス**

先輩からの

私は小さなころからものづくりに興味がありました。高校に進学する前は「建築関係の仕事に就きたいな」と漠然と思っていましたが、実際は、地元にある塩釜高等学校の普通科に進学しました。

そして、高校生の時、物理で勉強した電気の流れや回路の仕組みに興味を持ったことや、両親にパソコンを買ってもらったことがきっかけで、大学でプログラミングを学ぼうと思いが現在に至っています。

普通高校に通うみなさんでも、ものづくりの仕事で十分活躍できるはずですよ。さまざまな可能性を検討して、専門的な知識が必要だと感じたら大学に進学する。こうして将来の就職先の選択肢の幅を広げることができるところが普通高校で学ぶ良さだと思っています。

同社の開発を担う技術部に所属する津田光太郎さんは、製品の設計などを行う。「自社製品の設計のほかに、社内でも検査治具の設計も担当しています。これから、工場でも組み立てを依頼していた検査治具の様子を見に行くところなんです」

検査治具とは、製品の寸法や性能などの検査を効率良く正確に行うため、その製品専用で作られる装置のこと。津田さんは、検査治具の組み立て現場に足を運び、作業の担当者との意見を交わした。

「製品の開発は、自分一人だけの力ではできません。会社内のいろいろな人の協力をいただきながら、スムーズに仕事が進められるように、上司や会社のみなさんとの「報・連・相」を大事にしています」

**さまざまな作業を同時進行
一つ一つの経験をやりがいにつなげる**

津田さんは、製品の開発スケジュールが記された計画書に従いながら、担当する複数の製品の設計や開発、機能の検証などの作業を並行して行っている。

「営業担当者からの依頼を受け、見積書に記載する費用を計算することもあります。さらに今年から、会社のホームページの更新も担当しているんです。忙しい毎日ですが、夢だった技術者の仕事に就くことができていると充実しています」と話した。

高校生の時、インターネット上で公開されているパソコン用のフリーソフトウェア

宮城製粉株式会社
 所在地 角田市島田字三島70
 TEL: 0224-61-2525
 http://www.miyagiseifun.jp/
 代表取締役社長 後藤 浩一
 資本金 900万円
 設立 2009年5月
 従業員数 75人(2018年8月現在)
 事業内容 食品の製造・販売
 経営理念 体に良い食品へのこだわり



滅菌処理を終えた製品を検査工程まで運搬する



事務所のパソコンに向かってデスクワークを行う



製品を検査工程に送り、目視とセンサーによる最終検査を行う



バック詰め装置の操作パネルで設定を行い稼働させる



未来のACEへ
 アドバイス

工業高校の機械科で勉強していたため、食品業界への就職は、ほぼノーマークでした。でも、高校の先輩が就職していたこともあり、この会社へ見学をしたことで現在に至っています。自然に囲まれたのどかな場所に、国内トップシェアの製品を作る工場があったことを知り、とても驚いたことを覚えています。

地元には、みなさんがまだ知らない食品メーカーがたくさんあると思います。日頃から、どんな企業があるのか関心を持つことで、たくさんの方が活躍できるでしょう。オスメなのがあるところ、スーパーなど食品を多く取り扱っているところでアルバイトをしておくことです。地元の食品メーカーが作っているさまざまな食品を目にするチャンスが潜んでいます。

業界の一人として、より多くの方が食品メーカーに興味を持って、就職先に選んでくれたらうれしいです。

CASE
 仕事
 図鑑
 04

業務スーパーの成長を支える
 手ごろで美味しい食品

製造
 いちじょう かずのり
 一條 和則さん(32歳)
 宮城製粉株式会社(角田市)



製造ラインの流れを読み
 安心安全な食品づくりを意識する

レトルト食品の製造ラインで
 安定した稼働を管理する

角田市にある宮城製粉株式会社の第三工場で、大きな圧力釜から大量のレトルトカレーのパックを取り出す一條和則さんの姿があった。

「朝にパッケージに詰めたカレーを、この釜で滅菌処理を行います。この後、別の部屋に移動させて、最終検査と箱詰めが行われます」

同社は、業務スーパー向けに団子、草餅などの原料やミートソース、レトルトカレーなどの食品を製造している。急速冷凍

技術によって、国内初となるヨモギを使った製菓材料の冷凍製造に成功。一年を通じて質の高い製品の提供が可能となり、全国シェア4割を誇っている。また、一條さんが働く第三工場では、20種類以上のレトルト食品が製造されている。

「私の仕事は、製品のバック詰めをする機械を担当しつつ、良い製品が安全に作られているかについてライン全体を管理することです。ラインを流れる製品や設備の状態だけではなく、作業の効率や作業者の安全など、気を付けなければならぬことがたくさんあります」と説明する一條さん。

「最近、業務スーパーが世間で注目されていることもあって、ここで作っている製品がテレビや雑誌などで紹介されることもあります。有名なタレントさんが、私たち



- 1 滅菌処理が終わったレトルトカレーのパックを圧力釜から取り出す一條和則さん
- 2 検査工程の担当者に声を掛け、作業の進み具合などについて話し合う
- 3 同社が手掛ける食品は、全国に業務スーパーを展開する株式会社神戸物産(兵庫県)に卸している。同社も神戸物産グループ企業の一員として、「食の製販一体体制」に貢献している

「手に職を付けてから安心して働きたい」と思い、白石工業高等学校の機械科で学んだ一條さんにとって、同社への就職の決め手となったのは、3年生の夏に行った応募前職場見学だったという。

「ちょうどヨモギを使った製菓材料製造の最盛期だったこともあって、工場内はとても活気にあふれていました。とても忙しそうにしている中で、みなさんが私に優しくあいさつしてくださり、『雰囲気の良い現場だな。自分もここで働いてみたいな』と感じました」

こうして、高校卒業後に同社に入社した

